

おさいど

神村ふじを



ロシアがウクライナに侵攻し、一般人をも標的にした大量虐殺が行われている。トルコで行われた双方の外相による会談後、ロシアのラブロフ外相は記者団とのインタビューで、「我々はウクライナを攻撃していない」と平然と言いつつ放った。

あれが攻撃でなければ一体何なのか。子どもにも分かるような嘘を全世界を相手に発言する神経。日本政府はこんな男と北方領土の話し合いをしていたかと思うと、相手にする方が馬鹿である。発展的な話など望める筈がない。ロシアの世界的な信用は地に落ちた。

逃げ惑う子どもの姿。子どもを抱きながら涙している母親。

兵士に抱えられながら川を渡る老人たち。何とむごいことをロシアはするのだろうか。民衆と乖離した指導者プーチン。裸の王様プーチンに裸であることを側近たちは教えられなかったのだろうか。ロシアの民衆の良心がロシアを動かさなければロシアに未来はない。

3月とは言え、ウクライナはまだ雪の季節。暖房もない地下壕で肩を寄せ合ってじっと耐えているウクライナの人々に、暖かな春が早く来ることを願うばかりである。

さて、小正月のことを少し書いてみたい。団子木飾りや雪中田植えなど、かつては行事がいろいろあったが、地区こぞで行われる行事は、近年だんだん少なくなってきており、私のところでは「おさいとう」だけが細々と行われている。私たちは、子どもも大人も「おさいど」と呼んでいる。

「おさいど」は「お祭燈」または「お柴灯」などと書き、小正月行事の代表的なものである。

新年の季語にもなっている「左義長」というのが一般的な言い方のようなのだが、「どんど焼」「さいと焼」「おにび」など全国で呼び名は様々で、共通しているのはいずれも小正月に行われる火祭りの行事ということである。

私の住んでいるところでは、松や杉などの生木を芯棒にして、藁や豆殻などで簡単な櫓を組み、それを歳徳神のいる明けの方角から火を点ける。

その際、正月のしめ飾り、祈祷札などもいっしょに燃やす。子どもたちは書き初めや絵画を燃や

し、それらが高く舞い上がれば上がるほど、「絵や習字が上手になる」「成績が上がる」と言われている。

また、団子木で飾った団子を焼いたり、針金に刺したスルメを焼いたりする。藁灰が口に入ったりが、風邪を引かなくなったり、丈夫になると昔から言われている。

「いわい、いわい（祝い、祝い）」と声を掛けながら、一年の無病息災、五穀豊穰、家内安全を祈願する。

民俗学に関する辞典を繙くと、全国各地に似たような行事が残っており、「火にあたると若返る」とか「残りの灰を体に塗ると病気にかからない」とか「燃え残りの木を持ち帰って家に置く」とか「幸せになる」といった言い伝えがあり、「おさいとう」の火はまさに神の火として神聖視されていたようである。

最近では、藁不足で藁を集めるのにひと苦労であると言う。というのも手刈りであった時代と違って今はコンバインによる稲刈りで、藁もその場で刻まれてしまうので、藁そのものがなくなってしまうのである。だから、行事を主催する区や子ども会の役員衆は大変だ。わざわざ手刈りをお願いし、藁を取って置いてもらわなければならないのだ。

今年2月5日（土）に地区内のお不動様近くで行われた。しつとりと暗くなってから「おさいど」の点火が始まる。火付け役は今年中学校を卒業する子どもたちだ。今年で子ども会も卒業。成

長の証、立志、高校受験、いろんな思いを胸に明けの方角から火を点ける。今年の恵方は北北西、赤々とした炎がたちまち勢いよく燃え盛る。

個人で屋外では物を燃やすことができなくなったため、この炎のオレンジ色というか朱色というのかこの色合いは最近見ることができなくなってしまった。暖かく優しさに溢れた「おさいど」の炎。

みんな体を寄せ合いながら「おさいど」の火にあたる。お護符とお神酒が振る舞われ、無病息災を願う。

私たちの住んでいるような田舎でも、地区の人たちみんなと顔を合わせる機会はめっきり少なくなった。久しぶりにあった人たちと話せる絶好の機会でもある。

かつては、ほとんどの集落ごとに行われていたため、この時期この時間になると、方々の「おさいど」に火が付いて、それはそれは見事であった。

近くの左沢線の土手に登ると、まるで町中が燃えているように見えたものだ。そこを左沢線の気動車が雪を蹴散らしながら走り抜けていく。絵に描いたようなシーンであるし、俳人ならずとも一句詠みたくなるような場面であった。

今では「おさいど」を行う地区が少なくなったため、幻想的なシーンは見られなくなった。隣にいた夫婦連れが、針金にアルミホイールでくるんだ立派なスルメイカを焼くところだった。

「お父さん、焼いできる（焼いてください）」

「ほだな（そんなの）、お前焼げ」

「あつづいもの（熱いから）、お父さん焼いでつちや（焼いてくださいな）」

「お前は人より面の皮あつづいがら（厚いから）、火など何ともないべ（何ともないだろう）。お前焼げず」

何だかんだ言っても結局は親父が焼くことになったのだが……。

そんなやり取りをしていた夫婦も、家に帰ってからご利益いっぱいのスルメイカを二人仲よく頬張ったに違いない。

コロナに悩まされながらも、学校はまもなく卒業シーズンを迎える。

参考文献…「定本 柳田國男集 第十三巻」（1963年、筑摩書房）

「大江町の年中行事」（1984年、大江町老人クラブ連合会）